

「トウインクルタツシユ」

岩本鉄男は、かつて東京でシステムエンジニアとして激務をこなす勝ち組のサラリーマンだったが、職場の先輩が目の前で倒れて亡くなったのを機に、その時の映像が頭に再現されるようになり、不眠や頭痛、下痢などの変調を来す。さらに会社帰りに交通事故を起こしかけたことから、人を殺してしまうのではないかと不安にさいなまれる。精神科を受診し、「強迫性障害」という診断を受けて治療するもののよくなり、会社を退職、妻にも浮気されて離婚、すべてを失って大嫌いだつた和歌山の実家に戻つて、清掃の仕事をする母親とひきこもりの妹と暮らしている。唯一の楽しみは、憧れの精神科医、はるか様の診察を受けることだが、病気はよくなり、仕事もできず、生きることに絶望している。

最近の鉄男の悩みは、痔からの出血が止まらないことである。母親からもらつた生理解ナブキンで対処しているのだが、はるか様からは専門医の受診を勧められる。肛門を診察されることに抵抗があると言つと、猫が肛門を見せびらかして歩いていること、恥ずかしいと思うのは人間だけでなく、猫の肛門を隠す「トウインクルタツシユ」というアクセサリーがあることを教えてもらう。

ある日、パチンコをしている最中に妹から電話がかかつてきて、母親の様子がおかしいと言われる。家に帰ると、母親はいびきをかいて寝ているが、鉄男は氣にとめることなく、そのままやり過ごす。翌日母親が息をしていないことに気づいて、救急車で病院に搬送するもすでに手遅れで、鉄男

は自分が殺したのではとパニックを起こし、その場で氣を失つてしまう。目を覚ました鉄男は、はるか様に「自分が母親を殺した」と告白したところ、それはいつもの強迫観念ではないかと言われるが、何が幻想で何が現実が分からない。ただひきこもりの妹が鉄男を心配して病院に来てくれたのを知り、はるか様に勧められるまま痔の検査を受けることを決意する。

検査の結果、病気はただの痔ではなく、クローン病という難病であることが分かる。一時は死も覚悟した鉄男だったが、クローン病が完治するものではないものの付き合いつながり対処していく病気だと言われ、生きることを希望して治療を受ける。痔の症状は少しずつよくなり、それと共に、死に対する強迫観念も薄れていく。

母親の四十九日が終わったころ、鉄男は子供のころ家族で行つた秋葉山を訪れ、妹と取り合つたすべり台のてっぺんで和歌山の景色を眺めながら、母の死を悼む。

そんな鉄男に、一人の子供がすべり台をすべるように促すが、怖くてすべることができない。難なく滑り台をすべつた子供が言う。

「怖いのが面白いやで」

その言葉に、鉄男は、自分がかつて不安があつてもいろんなものに飛びこんできたことを思い出し、怖くても前に進んでみようとする。